

研究計画書

2023 年 7 月 5 日

所属：看護科 糖尿病センター

主研究者：中元美恵

研究テーマ

脳梗塞後の高次脳機能障害のある糖尿病患者さんへの関わり～患者が望む QOL とは～

1. 研究の背景（動機と意義）

高齢者のインスリン治療や併存疾患を持ちながら独居で生活をしている患者を経験する。急性期病院である当院では、地域から糖尿病治療での紹介となるが、当科に受診した時点でインスリンが必要となるケースが少なくない。さらにここ数年では高齢者の膵臓がん等の手術により、インスリン依存状態となる症例も増加している。このような背景でのインスリン治療は、自己注射指導をしながら自己管理可能かどうか見極め、家族の支援があるか社会資源の活用が必要かなど、環境を整え、自宅に帰るまで時間を要することになる。患者が安心して在宅に帰り、自宅で治療を継続するために、患者、家族、多職種連携（IPW）のできることは何か、考える機会を得たため 1 症例を報告する。

研究目的

訪問看護が必要な患者が、訪問看護を次第に拒否されるようになった。必要なインスリン治療・ケアを患者が拒否をするのを、丁寧に説明し継続するように進めてきた。しかし患者の意思決定支援はできていたのか、QOL を低下させていたのではないか。今後の患者支援の一助とする。

2. 研究方法

1) 研究のデザイン：

症例報告 後ろ向き研究

2) データ収集期間：

2018 年 11 月～2022 年 1 月

3) 研究対象者：

A 氏 60 歳代男性 独居

膵性糖尿病 脳梗塞後の高次脳機能障害

4) データ収集法

(1) カルテ、療養指導記録、検査データの閲覧

5) 看護の実際

患者は、（以後 A 氏と表記する）脳梗塞後の高次脳機能障害がある独居の 60 歳代の

男性、高血糖で入院し入院中から関わりをもった。A氏のハンドケア、フットケアをしながらコミュニケーションをとり、退院に向けて訪問看護を依頼することに同意され退院の運びとなった。しかし体調が改善するにつれ、訪問看護は必要ない、何でも自分でできることを、受診毎に訴えられるようになった。その都度、主治医や看護師、友人、家族で説明を繰り返す状況であった。そんな中、家族からA氏が嫌がる訪問看護を本当にこのまま続けてよいのかとの問いがあった。患者の意思決定とは、患者のQOLとは何か、治療・ケアの狭間で答えが出ないまま、自宅で亡くなられた。

A氏、家族、多職種で、A氏の支援に悩み、A氏にとってのQOLを考える機会を得た。

3. 倫理的配慮

患者の個人情報保護に配慮し、個人が特定できる事柄は使用しない。患者、家族からは口頭で同意をいただき、記録にその旨を記載した。本発表が終了後資料はシュレッターで破棄する。

4. 参考文献

- 1) 日本糖尿病学会（編）糖尿病診療ガイドライン 2016. 南江堂
- 2) 日本糖尿病学会・日本老年医学会 編・著 高齢者糖尿病治療ガイド 2018. 文光堂
- 3) 障害者福祉サービス等事業者向け高次脳機能障害支援マニュアル
- 4) 国立障害者リハビリテーションセンター、高次脳機能障害情報・支援センターHP
(2023/4/1 閲覧)